

今、日本で、世界で、起こっていること

東北福祉大学特任教授 有田 和正

●38年ぶりに日本生まれのトキ巣立つ●

一時は絶滅の危機を迎えた日本生まれのトキが5月、38年ぶりに巣立った。「ニッポニア・ニッポン」という学名をもつトキは、1952年に国の特別天然記念物に指定され、1960年に国際保護鳥に選定された。1981年には最後の野生のトキ5羽を佐渡で捕獲、1999年に中国からトキ2羽を贈られ、日本で初めて人工繁殖に取り組みひなが生まれた。日本生まれの最後の野生のトキは2003年に死亡し、環境省は人工繁殖に力を入れざるを得なくなった。2008年に佐渡で初めて人工繁殖したトキを10羽放鳥し、自然の中での繁殖をめざしたがなかなかうまくいかず、2010年には佐渡のトキ保護センター（図1）で、自然に放つ訓練中のトキが9羽、天敵のテンに襲われて死亡するという事故も起こった。

そうした困難を乗り越えて、毎年放鳥を続けてきた結果、2012年には3組のペアから8羽のひなが生まれた。5月25日に1羽のひなが巣の横にある枝に飛んで移動したところを、環境省の職員がインターネットのライブ映像で確認した。残りのひなたちも6月下旬までには巣立った。幼鳥8羽のうち1羽は落ちていた羽のDNA分析で雌とわかった。

幼鳥が空に飛び立つのは、林の中で数日間飛び練習をしてからとみられている。飛び立ったあとも数か月間は親鳥と暮らし、えさの取り方など自然界で生きるすべを学ぶ。独り立ちには半年以上かかるうえ、幼鳥は病気にかかりやすく、天敵にも狙われやすい。中国では生まれたひなが1年後に生きている確率は50%程度。自然界に生きることは厳しい。

今までうまくいかなかったトキの巣立ちが、今年はどうしてうまくいったのだろうか。ひなを生んだ3組のうち2組は、昨年も産卵したペアであり、やはり経験を積んできたことが大きいだろう。交尾のしかた、巣をつくる場所（枝打ちをしたスギに巣をつくったため、テンも登れな

かったようだ）の選び方などがうまくいったのだ。また4月20日には卵をあたためていたトキのペアをトビが巣から追い出して1時間30分ほど卵を温め続け、トビが飛び去った後に再びペアが抱卵するという珍しいできごともあった。

さらにえさの確保がうまくいったことも大きい。地域の人やボランティアがつくったビオトープ（生物群の生息地）も巣の近くにあり、親鳥がえさを十分に与えられたからだ。佐渡の人たちはトキのために田畑に農薬を撒くのをやめたり、川や溝、沼などにもえさ場をつくる努力をしてきたのだ。

今、日本には約200羽のトキが生息しているが、これらはいずれも中国から贈られたトキの子孫である。日本の空にトキが飛びまわる日をみんな待ち望んでいる。



図1:佐渡島にあるトキ保護センター

●自然の宝庫に押し寄せる津波の漂流物●

アラスカ湾では、アジアや漁船などから漁具やペットボトルなどが流れ着く問題を長年抱えてきた。これまでは中国語や韓国語、ロシア語が書かれたペットボトルや洗剤の瓶などが多かったが、最近では東日本大震災の津波でさらわれた漂流物が押し寄せている。海岸には流木に混じってさまざまな種類のごみ、スポーツ飲料やコーヒーの缶、焼酎の瓶なども見える。日本語の製品名が書かれた船舶用エンジンオイルの缶や、灯油タンクなどもあり、自然環境を汚す油は土地の人が一番心配しているものだという。漂流物の撤去に長年あたってきた人たちも「こんなに多くの発泡スチロールやウレタンは見たことがない」とこぼしている。集めた漂流物はアンカレジなどで再利用業者に託すか、埋め立てる予定だという。

なかでもアラスカ湾の無人島・モンタギュー島は、クジラ・イルカ・サケ・マス・クマ・シカ・海鳥が住みついている「自然の宝庫」である。広さが約800km²のモンタギュー島は海流と風の流れから、アラスカ湾のなかでも漂流物が集中する場所らしい。湾内の自然環境を守る地元NPOのメンバーは「発泡スチロールとウレタンがまた増えた」という。流れ着くプラスチックごみをシカやクマ、海鳥が誤って食べたり、首にごみが絡まって窒息したりする例が続いている。今回増えた発泡スチロールは、かけらが海鳥の卵などにも似ているため、動物たちが誤って食べる危険性が大きい。

アラスカ以外にも大きな漂流物がアメリカ合衆国に流れ着いている。6月5日の早朝には、アラスカのずっと南、オレゴン州ニューポートに、青森県三沢漁港の浮き桟橋が1年3か月余りもかけて流れ着いた。幅約20m、奥行き約6m、高さ2m余りもあり、州当局は撤去方法や費用に頭を悩ませている。アメリカ海洋大気局（NOAA）は、日本政府のデータをもとに、津波でさらわれた推定500万tのがれきのうち、途中で沈むものや、海流に閉ざされた太平洋ゴミベルト付近にとどまるものを除き、軽いものを中心にした約150万tがアメリカ西海岸を直撃すると推測（図2）。その時期を2013年と予測していたが、風の具合で予想より早く到着しはじめているという。だが、何年漂着が続くのか、見通しは立っていない。

4月にはアラスカ湾のミドルトン島で、日本語の書かれたサッカーボールが見つかった。このボールは岩手県陸前高田市の高校2年生、村上岬さん（16歳）のものだった。自宅を津波で失い、家のものは何もみつからなかったため「自分の持ち物が何ひとつみつかっていなかったのととてもうれしい」と村上さんは話している。ボールをみつけたデビッド・バクスターさん（51歳）は「妻が日本人だった偶然もあって、持ち主に届けるのは自分の使命だと感じている。無事に返したい。5月には日本に行く予定なので、その際にできれば渡したい」と語り、後日ボールが持ち主に届けられた。津波はさまざまなドラマをつくったようだ。



図2：2012年12月の震災がれきの分布予測と、太平洋ゴミベルトとよばれる海域